

第 45 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

青山 里愛
Aoyama Satoe

1. はじめに

第 45 回日本核医学技術学会総会学術大会は、2025 年 11 月 13～15 日にかけて、京都市勤業館「みやこめっせ」にて開催された。大会長は太田三恵子先生（岐阜県総合医療センター）、実行委員長は石原匡彦先生（岐阜大学医学部附属病院）が務め、大野和子先生（京都医療科学大学）が会長を務める第 65 回日本核医学会学術総会との合同開催となった。「[結像と観象] 核医学と人の未来」をテーマに掲げた本大会は、現地参加とオンデマンド配信を併用するハイブリッド形式で行われたが、現地には 2200 名を超える参加者が集い、大盛況となった。会場周辺は平安神宮や美術館が立ち並ぶ文化エリアであり、京都駅からのアクセスも良く、美しい紅葉と落ち着いた雰囲気の中で参加することができた。

筆者は初日の午前中に会場に到着したが、既に大勢の参加者で賑わい、本大会への期待の大きさを感じた。混みあってはいたが、会場スタッフが随所に配置され、会場地図を眺めていると親切に声をかけてくれたので、迷うことなく会場内を移動できた。

2. 本学会に参加して

本大会のプログラムは、核医学の基礎を学ぶベーシックセミナーから応用に踏み込むアドバンスセミナー、各種シンポジウム、心臓特別講座、卒後教育プログラム、特別講演、技術講演や学生セッション等、幅広い内容で構成されていた。特に合同企画が充実しており、臨床と技術の協働の重要性をあらためて認識させるものであった。心臓核医学では、撮像技術から臨床まで一連の流れを体系的に学べるセッションが用意され、またアミロイド PET や核

医学治療における新薬の登場によって核医学領域全体に活気が戻りつつあることを実感できた。大会テーマに含まれる“未来”という言葉が示すように、「これからの更なる発展につなげたい」という主催者の強い想いが随所に感じられるプログラムであった。本稿では、筆者が本大会で特に印象に残った話題や興味深い取組みについてご紹介したい。

まず、今大会で特に印象に残った点として、核医学治療の充実したプログラムが挙げられる。ちょうど新薬の発売時期と重なったこともあり、関連セッションはいずれも高い注目を集めていた。総論に始まり、医師、看護師、薬剤師、放射線技師といった多職種の立場から講演が行われ、それぞれの職種が直面する課題や教育プログラムが具体的に紹介された。内容はいずれも実践的で、学んだ事項を自施設で即活用できると感じられるものが多かった。また、核医学の個別化医療の推進に不可欠となるであろう dosimetry については、初学者向けの講演が用意されており、基礎を体系的に学ぶことができた。更に、東京都や原子力規制庁等、行政機関とのセッションも設けられ、法令や制度面から核医学治療を支える視点を学ぶことができた。なかなか聞く機会のない法規制の観点や、安全確保に向けた動向をわかりやすく理解、習得することのできた貴重な機会であった。

日本では既にいくつかの核医学治療薬が承認され、現在も様々な薬剤の治験が進行している。数年前から核医学治療に関するセッションは増加傾向にあったが、診断と治療が一体化となった theranostics の発展は、筆者ら放射線技師の役割を大きく変えようとしているとあらためて強く感じた。

そして本大会を象徴するもう 1 つの特徴として、

「多様性」の重視が挙げられる。本大会は、初めて女性が会長、大会長の両方を担当されるという記念すべき回となった。近年、学会としても多様性の推進が重要課題となっているが、今大会では日本核医学会のDE&I委員会と、日本核医学技術学会の女性活躍推進委員会（通称「はなみずきの会」）による合同企画「欧州に学ぶ働き方 ～未来へのヒント～」が開催された（写真）。

同セッションでは、欧州核医学会より Agata Karolina Pietrzak 氏をお招きし、ヨーロッパにおける放射線技師の役割や歴史、今後の展望について講演が行われた。筆者も女性活躍推進委員会の委員を代表して登壇し、議論に加わる機会をいただいた。会場からも質問やコメントがあり、多様な参加者が集い議論する場こそが、本大会の大きな成果の1つであったと感じた。

日本核医学技術学会における女性技師の割合は、約8%と少ないのが現状である。こうした活動を通して、性別を問わずすべての参加者が熱意を持って意見交換し、未来の核医学を築く姿に触れることができた。本セッションでは、女性活躍というテーマにとどまらず、前述した核医学治療のセッションで示された多職種連携や協働が不可欠であることを実感させられる機会となった。本大会では、日頃の業務に直結する内容から新しい技術まで幅広い話題が取り上げられ、多くの刺激を受けた。核医学技術の最新動向を一望できるだけでなく、今後の臨床・研究の方向性を示す貴重な機会となった。



写真 Agata Karolina Pietrzak 氏（前列中央）とはなみずきの会メンバー（後列左から3番目が筆者）

3. 終わりに

稿を終えるにあたり、次大会である第46回日本核医学技術学会総会学術大会の開催についてお知らせしたい。大会長は花岡宏平先生（近畿大学病院）、メインテーマは「輝く核医学道」である。会期は2026年11月19日（木）～21日（土）の3日間で、アクリエひめじ（姫路市文化コンベンションセンター）にて、第66回日本核医学会学術総会（会長 石井一成先生 神戸大学大学院医学研究科）と合同開催される。

「輝く核医学道」というテーマのもと、新たな知と連携が交わり、核医学の道がより一層輝きを増す場となることを願いながら、次大会を楽しみにしている。

（日本医科大学健診医療センター 放射線科（参加当時））